

英文法における V-ing 形の位置 †

谷 光生 *

宇都宮大学教育学部 *

伝統文法以降の標準的な捉え方の一つとして、動詞の-ing 形に動名詞と現在分詞という二つの異なった範疇を認めるものがある。これに対し、近年の理論研究の一部では、問題の二つの範疇の存在を否定する動きも窺える。動詞の-ing 形をめぐる、このような対立案を比較・検討することにより、より妥当な方向を見定め、学校文法の再構築にも着手する必要がある。

キーワード： 教授法，学校文法，英文法，動名詞，現在分詞，-ing 形

1. はじめに

近年の理論研究における成果を取り入れた一般的な英文法書の代表として、Quirk et al. (1985) と Huddleston and Pullum (2002) が挙げられる (以下、Huddleston and Pullum を H & P と略記)。いずれも大部であり、初学者にはやや敷居の高いものとなっているが、その内容については全編にわたり一定の信頼を置いて差し支えない。

さて、これらの英文法書では、動詞の-ing 形 (以下、V-ing) に対し、伝統文法家の多くや学校文法が自明であるとした動名詞と現在分詞の区別がなされておらず、(差し当たって細部を措くと) Quirk et al. (1985:1292, Note [a]) では分詞 (participle), H & P (2002:80, 1220) では動名詞分詞 (gerund-participle) という名称の下、動名詞と現在分詞の両範疇は一括した取り扱いを受けている。

また初学者向けの英文法書として洛陽の紙価を高らしている Swan (2005³) においても、動名詞と現在分詞の区別は強調されず、基本的には-ing 形 (-ing form) という術語で両者がまとめられている。(Swan (2005³) が、その入門書の性質にもかかわらず、p. 270 において、敢えて Quirk et al. (1985) による V-ing の取り扱いに触れているが、この点には注意を払うべきであろう。)

動名詞と現在分詞を区別しない (もしくはその区別が有意義ではない) という「区別不要論」とでも呼ぶべきこのような潮流に対し、安井 (2008) では警鐘が鳴らされているが、氏は問題の区別は依然として必要であるとして、伝統的な立場を堅持すべきで

ある (もしくはそこへ回帰すべきである) と説く。

本稿では以下まず安井 (2008) を検討することから始めるが、その際、氏の主張は区別不要論に対する誤解に基づくものであるため、(部分的に) 反論の体を成していない点を確認する。また氏は区別不要論を支える重要な論拠の一部を看過していることも指摘する。しかるのち、Quirk et al. (1985) 等らの区別不要論が妥当であることを示し、V-ing (の一部) の主たる性質を概観・整理する。最後に、より良い学校文法のための提言を簡単に行う。

2. 安井 (2008) の検討

伝統的にもまた学校文法においても、動名詞の最たる特徴の一つに、概略「V-ing という形式を持ち、その分布が名詞 (もしくは名詞句) と重なる」というものが挙げられる。このように規定される動名詞はその統語上の性質に鑑み、しばしば二つの下位類に分けられる。即ち、名詞的性質をよく反映するとされる名詞的動名詞と、動詞的性質をよく反映するとされる動詞的動名詞の二類である。両類の典型例を挙げると次のとおりで、(1a) における斜字体部分が名詞的動名詞、(1b) のそれが動詞的動名詞とされる。

- (1) a. *Brown's deft painting of his daughter is a delight to watch.* (Quirk et al. 1985:1291)
 b. *Brown's deftly painting his daughter is a delight to watch.* (Quirk et al. 1985:1291)

動名詞のこのような分類は、例えば昨年出版された

† TANI, Mitsuo*: The Locus of V-ing in English Grammar.

* Faculty of Education, Utsunomiya University.

ばかりの一般英語学習者向けの英文法書である向後ほか (2010) でも踏襲されており、日本における英語教育の現場では大方受け入れられたものと考えられる。安井 (2008) もこの分類 (とその前提となる、動名詞に対する既述の規定) を受け入れ、(1) に挙げた両例文を引用している。

一方、現在分詞は「V-ing という形式を持ち、形容詞的もしくは副詞的に機能するもの」という定義が伝統的にもまた学校文法においても一般的と考えられる。これについても安井 (2008) に異論はないようで、次の文を借用して、現在分詞の具体例としている。

(2) Brown is *painting* his daughter.

(Quirk et al. 1985:1291)

第1節で述べたように、安井 (2008) は Quirk et al. (1985) 等の唱える区別不要論に対し、反旗を翻したものであるが、この点は例えば次の反語法的な記述に端的に現れている。

(3) こういう、いわば純然たる名詞的な-ing 形 [例えば本稿の (1a) の該当要素一谷] と、He's coming におけるような純然たる動詞的-ing 用法とを一括し、単に-ing form (Quirk et al.), あるいは、gerund-participial [原文ママ一谷] (Huddleston and Pullum) と呼ぶだけでよいものであろうか。 (安井2008:6)

安井 (2008) で開陳されている細部の議論は首肯できるものが多いが、上記 (3) に例示される Quirk et al. (1985) 等への反論は当を得たものとは言えない。なぜなら、氏は Quirk et al. (1985) 等が (1a) のような名詞的動名詞と、(1b) のような動詞的動名詞と、(2) のような現在分詞の三つを対象として、区別不要論を唱道しているとの誤った前提に立脚のうえ反駁を試みているが、Quirk et al. (1985) 等が区別不要論の対象としているのは (1b) ならびに (2) のような V-ing に限られ、(1a) のような V-ing はその射程の域外にあるからである。Quirk et al. (1985:1290, 1291) の術語を用いると、(1a) のような V-ing は動詞的名詞 (verbal noun) であり、これは動詞に接尾辞-ing を付加することにより得られた派生名詞 (の一種) であり、(1b) や (2) の V-ing とはそもそも区

別されている。(第1節でも触れたが、Quirk et al. (1985) は (1b) と (2) のような V-ing をいずれも分詞と呼ぶ。なお、H & P (2002) も、Quirk et al. (1985) と同様、(1a) のような V-ing と (1b) や (2) のような V-ing を区別し、(1a) のような V-ing は名詞とする。H & P (2002) は (1a) のような V-ing を動名詞的名詞 (gerundial noun) と呼び (p. 81, p. 1187), (1b) や (2) のような V-ing は第1節でも触れたように動名詞分詞と呼んでいる。)

Quirk et al. (1985) の記述の仕方は注意深いもので、(1a) のような V-ing (即ち、動詞的名詞) に対しては、「そのような-ing 名詞の中には[...] (Some such -ing nouns [...]) (p. 1290) や「[...] はまた名詞であり[...] ([...] is also a noun, [...]) (p. 1291)」のように名詞という術語を用いるが、(1b) や (2) の V-ing のことは決して名詞とは呼ばない。

以上のとおり、安井 (2008) における誤解・誤読は明らかで、そのため Quirk et al. (1985) 等の区別不要論に対する真つ向からの反論とは成り得ないものとなっている。では、(1b) のような V-ing と (2) のような V-ing の区別に関しては、氏の議論から何か得られるものはあるだろうか。

氏は区別不要論に対して、「説明の不在」(p. 5) というキーワードの下、「動名詞無用論 [即ち、本稿での区別不要論一谷] を支えるために引用されている用例に対する自身 [即ち、Quirk et al. (1985) 等一谷] の説明ががらあきになっているといつていいよ」(p. 5) と述べ、動名詞と現在分詞を区別する伝統的な立場では簡便な説明が可能であることを示す傍証として、幾つかの統語現象を俎上に載せている。その内の一部をここで取り上げると、(ア) 主語・目的語といった文法関係 (もしくは名詞的・形容詞的・副詞的といった文中での機能) (p. 7) や、(イ) 同音異構造における機能である (p. 10)。(ア) に関しては、伝統的な立場なら、動名詞は主語や目的語として機能するが、現在分詞にはそのような名詞的機能はなく、形容詞的あるいは副詞的に機能すると簡単に捉えることが可能である。(イ) に関しては、例えば次のような同音異構造の場合、(4a) の swimming は動名詞であり、名詞が補語としての機能を果たしていると言え、(4b) の swimming は現在分詞であり、動詞が進行形として現れていると言える。

(4) a. "What's your hobby?" "It's swimming."

(安井 2008:10)

b. "What's is the dog doing?" "It's swimming."

(安井 2008:10)

このような具体的な議論の後、氏は「動名詞無用論者は、動名詞、現在分詞ごたまぜ論者、もつといえ、動名詞、現在分詞区別不能者であつてよいのか (p. 7)」「これら二つ [即ち、動名詞と現在分詞—谷] を区別しない理論 [...] では、どのような説明を加えるつもりなのであろうか。説明が不可能であるとは思わないが、動名詞を認める場合に比べ、すっきりしないものになるであろう (p. 10)」等と続ける。が、果たしてそうであらうか。

次節では区別不要論の下では、(1b) のような V-ing と (2) のような V-ing が「区別不能」なのでもなければ、問題となりそうな現象に対し、「すっきり」とした説明が不可能でもないことを論じる。しかのみならず、伝統的な立場では分析上の問題が生じる事例に対しても、区別不要論の下ではそのような事態に陥らないことを示す。

3. 区別不要論における区別と説明

区別不要論を支える最大の論拠の一つでありながら、安井 (2008) に見落としがある点は、区別不要論の下では (1b) や (2) のような V-ing という一つの形式に複数の用法を認めるというものである。この種の捉え方は、伝統文法ひいては学校文法においても、例えば to 不定詞に対して何らの疑義を差し挟むことなく行ってきたものであり、決してその場限りのものではない。このことは Quirk et al. (1985:1292, Note [a]) でも指摘されているとおりでである。この点を具体的に検討してみよう。(以下の議論は (1a) のような V-ing には当てはまらない点に注意されたい。と言うもの、前節で述べたように、区別不要論は (1a) のような V-ing をそもそも議論の対象とはしていないからである。)

(5) a. Painting a child is difficult.

(Quirk et al. 1985:1292)

b. Painting a child that morning, I quite forgot the time.

(Quirk et al. 1985:1292)

伝統的には、(5a) の V-ing は動名詞で、(5b) のそれは現在分詞とされるが、これは要するに V-ing に対し二つの異なる文法範疇を認めて来たということになる。一方、次のような to 不定詞はどのような扱い

を受けて来たであらうか。

(6) a. To paint a child is difficult.

(Quirk et al. 1985:1292)

b. To paint a child, I bought a new canvas.

(Quirk et al. 1985:1292)

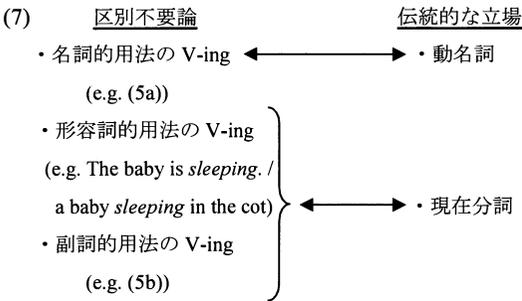
これらに対しては、二つの異なる文法範疇を仮定するのではなく、to 不定詞という一つの範疇に (名詞的・形容詞的・副詞的という) 複数の用法を認める分析を採用してきた。即ち、(6a) では to 不定詞が名詞的に機能しており、(6b) では同要素が副詞的に機能していると捉えることになる。(ここで一つ付言すると、V-ing に対し、動名詞と現在分詞の二つの範疇を認める伝統的な立場の下では、to 不定詞に対しても同じように二つの範疇を認めてもよいはずと言える。即ち、例えば (6a) を to 不定詞名詞、(6b) を to 不定詞分詞と呼んで、二つの異なった範疇を仮定してもよさそうであるということだ。しかしながら、奇妙なことに、伝統的にはこのような分析は取られなかった。この点を区別不要論から瞥見すると、伝統的な分析には不徹底さが残るということになる。)

もう半ば明らかと思われるが、区別不要論では (1b) や (2) のような V-ing に対しても、to 不定詞と並行的な捉え方をすることによって、動名詞と現在分詞の区別やそれらに対する説明を行う。つまり、区別不要論の下では V-ing という一つの範疇に複数の用法があることになり、(5a) の V-ing は名詞的に、(5b) のそれは副詞的に機能していると説明される。また (5a) の V-ing と (5b) のそれは、それぞれ名詞的用法の V-ing、副詞的用法の V-ing であるとして区別される。(Quirk et al. (1985) の術語を用いるなら、(5a) には分詞の名詞的用法、(5b) には分詞の副詞的用法が観察されるとなるであらう。また H & P (2002) なら、(5a) では動名詞分詞の名詞的用法、(5b) では動名詞分詞の副詞的用法が認められると言うことになろう。)

このように、区別不要論は V-ing における区別と説明を提示できるのみならず、不必要な区別を排除することにより、to 不定詞の各種用法との関連も捉えられる。(なお、V-ing の各種用法と to 不定詞の各種用法の並行性に対し、さらに that 節の各種用法を引き合いに出してもよいであらう。伝統文法や学校文法では、that 節にも名詞的・形容詞的・副詞的の三つの用法を認めることがあるのだから。)

ここで、区別不要論と伝統的な立場の対応関係

を示すと、次のようになる。



上の対応関係における「○○的用法の V-ing」の部分
は、Quirk et al. (1985) と H & P (2002) ではそれぞれ
「○○的用法の分詞」「○○的用法の動名詞分詞」
と呼ばれるはずのものである。

以上、区別不要論においても、V-ing に対して区
別と説明が可能であることを論じたが、次に伝統的
な立場では分析に困難や無理が伴うものの、区別不
要論の下ではその限りではないという事例を少しく
検討してみよう。

次の諸例における V-ing は使用頻度がいずれもか
なり高く、周辺的もしくは例外として特別扱はず
べきではないと考えられるが、それにもかかわらず、
伝統的な立場からはこれらの V-ing に対して「すっ
きり」としない持って回った説明しか提示されず、
中には動名詞か現在分詞か「区別不能」と言わざ
るを得ないものも存在する。

- (8) a. Who is that speaking? (Swan 2005³:571)
b. In June all the students go looking for jobs.
(Swan 2005³:202)
c. Come swimming with us tomorrow.
(Swan 2005³:202)
d. Do you think there's any use trying to explain?
(Swan 2005³:580)
e. I was more than an hour trying to locate such
drains without success.
(example attested on the Internet)
f. What's it doing raining?
(Kay and Fillmore 1999:3)

安井 (2008:11) では、おそらく (8) のような例を
想定して「[...] すべての-ing 形は常に必ず画然と二
分されなければならない、と主張しているわけでは

ないということである」と述べられているが、換言
すれば、これは動名詞でも現在分詞でもない V-ing
(もしくは両者の混淆のような V-ing) を認めるとい
うことで、ひいては区別不要論にも一脈通ずること
になり、氏の主張はその分弱くなる。

一方、区別不要論の下では (8) のような例は「い
ずれも V-ing である」というだけで事足りる。伝統
的な立場では、動名詞か現在分詞かという選択が常
に迫られるが、区別不要論は両者の区別をしないの
だから、この種の問題は生じようがない。また仮に
区別不要論に対し、(7) で示されるような「○○的
用法の V-ing」という点からの回答を求められたなら、
それは「用法を (7) のような三つに限るなら、(8) の
V-ing は形容詞的用法もしくは副詞的用法のいづれ
かの V-ing に分類される。が、そもそも用法は (7) に
おける三つに限られるわけではないので、(8) の諸
例は『その他の用法』に当たる」ようになる。(今
少し具体的に補足すると、伝統的な立場では例えば (8)
の raining は動名詞とも現在分詞とも言えないが、区別不
要論ではこれは副詞的用法の V-ing、もしくはその他の用
法に分類することが可能である。) この点は、to 不定詞
においても、名詞的・形容詞的・副詞的という三つ
の用法に分類しきれず、その他の用法としか言えな
いものが存在するのと並行的である。

これまでの考察から、伝統的な立場は妥当性に欠
け、Quirk et al. (1985) 等らの区別不要論に肯じざる
を得ないと結論される。

4. 「V-ing 名詞」と「名詞的用法の V-ing」

学校文法における V-ing の扱いと最近の理論研究
におけるその扱いには、やや隔たりがある。もちろ
ん最近の理論研究においても各種の V-ing に対して
統一した見解が既に出来上がっているわけではない
が、先に触れたように、(1a) のような V-ing は名詞
であり、これは (1b) のような V-ing とはその性質が
大きく異なるという分析は、ほぼ揺るぎのないもの
であると言える。しかるに学校文法では (1a) のよ
うな V-ing は名詞的動名詞、(1b) のような V-ing は
動詞的動名詞と呼ばれ、いずれの名称にも動名詞と
いう用語が現れるため、幾つかの点で不必要な誤解
や混同が生じていると思われる。本節では以下これ
ら二種類の V-ing の主たる性質を概観・整理し、よ
り良い学校文法への備えとする。なお、便宜上、(1a)
のような V-ing を「V-ing 名詞」、(1b) のような V-ing

を「名詞的用法の V-ing」と呼ぶ。

まず V-ing 名詞が名詞としての特徴を備えていることを確認するが、この点は次の (9) に示される統語上の性質から保証される。

- (9) a. *Zelda's reluctant signing of the contract*
(Langacker 1991:30)
b. *the signing of the contract (by Zelda)*
(Langacker 1991:30)
c. **Zelda's having singed of the contract*
(Langacker 1991:30)
d. *Brown's paintings of his daughter*
(Quirk et al. 1985:1290)
e. **the not shooting of the hunters*
(Pullum 1991:768)
f. *[The counting of the votes that took longest] was in the 4th district.*
(Abney 1987:137)

即ち、V-ing 名詞は形容詞によって修飾されたり (9a)、冠詞を伴うこともある (9b)。また一般に助動詞から名詞への派生は存在しないが、V-ing 名詞でもその点は同様で (9c)、複数形接尾辞の付加が可能な場合もある (9d)。さらに否定辞 not は名詞を直接修飾し得ないが、この点は V-ing 名詞にも当てはまる (9e)。関係節を伴うこともあり得る (9f)。

V-ing 名詞が名詞であることは、その意味上の性質からも支持される。一般に、名詞は様々な意味的側面を潜在的に持ち、その内の特定の側面がコンテキストに応じて焦点化される。例えば次の (10) に示されるように、名詞 party はコンテキストに依存して、様々な意味的側面 (例えば、様態・期間・妥当性・事態等) が焦点化され得る。

- (10) a. *The party was boisterous* (Langacker 1991:33)
b. *The party lasted three hours.* (Langacker 1991:33)
c. *The party was ill-advised.* (Langacker 1991:33)
d. *The party came as a big surprise.*
(Langacker 1991:33)

この点は V-ing 名詞にも当てはまり、次の (11) に示されるとおり、コンテキストに応じて、特定の意味的側面が焦点として浮上する。

- (11) a. *Harvey's taunting of the bear was merciless..*
(Langacker 1991:32)
b. *Harvey's taunting of the bear lasted three hours.*
(Langacker 1991:32)
c. *Harvey's taunting of the bear was ill-advised.*
(Langacker 1991:32)
d. *Harvey's taunting of the bear came as a big surprise.*
(Langacker 1991:32)

以上より、V-ing 名詞は十全たる名詞であり、他の派生名詞と特に変わる所はないと言える。従って、V-ing 名詞だけを特別視して、(名詞的) 動名詞という特殊な名称を与えることは避けるべきであろう。なお、V-ing 名詞は他の派生名詞とはやはり異なるのだという論拠の一つに、V-ing 名詞が不変化詞を伴い得るというものがある。が、この性質も V-ing 名詞に限られたものではなく、他の派生名詞にも見られることであり、V-ing 名詞を特別扱いする根拠にはならない。以下の諸例を比較されたい。

- (12) a. *I had four tellings off from the teacher last week.*
(Dixon 2005²:348)
b. *cleaning up / putting off / talking into / making up*
(Dixon 2005²:348)
- (13) a. *Jane is a looker after of children from many families.*
(Dixon 2005²:345)
b. *looker on / sleeper in*
(Dixon 2005²:345)
- (14) a. *John is a very good washer uper (of dishes).*
(Dixon 2005²:346)
b. *picker upper (of rubbish) / putter offer (of meetings) / eater upper (of leftovers) / runner downer (of someone's reputation) / filler inner (of forms) / taker onner (of challenges)*
(Dixon 2005²:346)
- (15) a. *John's sum up of the discussion was most helpful.*
(Dixon 2005²:347)
b. *back up / rip off / figure out*
(Dixon 2005²:347-348)

次に名詞的用法の V-ing に目を向けよう。名詞的用法の V-ing が伝統的には (動詞的) 動名詞と呼ばれ、

名詞（もしくは名詞句）の一種としての扱いを受けて来たおそらく最大の理由は、文中での分布ということになろう。即ち、純然たる名詞（もしくは名詞句）が主語や目的語の位置に現れるのと同じように、名詞的用法の V-ing も同種の位置に現れるのだから、名詞的用法の V-ing も名詞（もしくは名詞句）であるというものだ。しかしながら、この論法は受け入れるわけにはいかない。なぜなら、主語や目的語の位置には名詞（もしくは名詞句）以外にも *that* 節や *for-to* 節 (*to* 不定詞の名詞的用法)、さらには前置詞句も現れ得るからだ。(具体例は Jaworska (1986) ならびに Newmeyer (2003) を参照されたい。) 上記の論法で行くと、*that* 節も *for-to* 節も前置詞句も等しく名詞（もしくは名詞句）となるが、この帰結を受け入れる者はいないであろう。従って、名詞的用法の V-ing (即ち、伝統的には (動詞的) 動名詞) の性質を考察する際には、それが名詞（もしくは名詞句）ではなく、他には見られない独自の性質を持つものであるという点にまずは着目する必要がある。(なお、(動詞的) 動名詞という名称からは問題となる構造が名詞（もしくは名詞句）であるとの誤った連想が喚起されやすいため、この点にも注意が払われるべきである。)

以下、名詞的用法の V-ing が持つ主たる性質を V-ing 名詞と対比しながら確認しておこう。統語上の性質においては、名詞的用法の V-ing には動詞的特徴が多く認められ、V-ing 名詞とは対照を成す。次のとおり、形容詞ではなく副詞により修飾され (16a)、冠詞は容認されない (16b)。また助動詞に接尾辞 *-ing* を付加することは可能であるが (16c)、複数形接尾辞を付加することは出来ない (16d)。さらに否定辞 *not* により修飾され得るが (16e)、関係節を伴うことは出来ない (16f)。

- (16) a. *Zelda's reluctantly signing the contract*
(Langacker 1991:30)
- b. **the signing the contract (by Zelda)*
(Langacker 1991:30)
- c. *Zelda's having singed the contract*
(Langacker 1991:30)
- d. *Brendel's performing(*s) Boulez's works*
astonished the critics. (McCawley 1998²:497)
- e. *my not leaving* (Pullum 1991:768)
- f. **(his) leaving her that you predicted*
(Pullum 1991:769)

名詞的用法の V-ing はその意味上の性質に関しても、V-ing 名詞とは対照的である。V-ing 名詞は名詞であるため、コンテキスト次第で様々な意味を表し得るのに対し、名詞的用法の V-ing は行為（もしくは事態）しか表さない。この点は名詞的用法の V-ing がその統語上の性質として動詞的な特徴を見せるのと軌を一にしている。具体例を通し、この意味上の性質を確認しておこう。(17a) と (17b) にはいずれにも名詞的用法の V-ing が現れているが、容認されるのは (17a) だけである。

- (17) a. *Sam's washing the windows was a shock to*
everybody. (Langacker 1991:32)
- b. **Sam's washing the windows was meticulous.*
(Langacker 1991:32)

その理由は (17a) では主語である名詞的用法の V-ing が表す意味 (行為もしくは事態) と述部の表す意味が上手く調和するが、(17b) ではそうは行かないからである。(17b) の述部はその主語に様態を表すものを要求するが、主語である名詞的用法の V-ing は V-ing 名詞とは異なり、様態を表すことはなく、そのため主語の意味と述部の意味が上手く調和していない。(なお、様態を表す V-ing 名詞は (11a) に例示される。)

具体例を今一つ付け加えよう。次の (18a) の V-ing は表面上の統語的性質からは V-ing 名詞とも名詞的用法の V-ing とも捉えられる。従って、前後のコンテキストがない限り、V-ing 名詞としての意味解釈 (例えば様態) も、名詞的用法の V-ing としての意味解釈 (例えば行為) も、可能となる。だが、(18b) の V-ing は統語的に名詞的用法の V-ing でしかありえず、その結果、行為の意味は表すが、様態の意味は表さない。

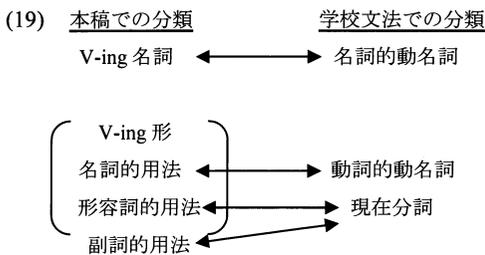
- (18) a. *They liked our singing.* (Quirk et al. 1985:1065)
- b. *They liked our singing folk songs.*
(Quirk et al. 1985:1065)

以上、V-ing 名詞と名詞的用法の V-ing の主たる性質を確認したが、V-ing 名詞は単なる派生名詞であるため、これを (名詞的) 動名詞と呼ぶのは不適切であり、名詞的用法の V-ing は他には見られない独自の性質を多数持ち、さらに名詞（もしくは名詞句）で

もないのだから、これを（動詞的）動名詞と呼ぶのは誤解を招きかねないと言える。

5. 結びに代えて

これまでの考察に基づくと、英語に存在する各種の V-ing は二種類に絞られることになる。即ち、V-ing 名詞と呼んだものと、（主として）三つの用法を持つ V-ing である。いま仮に後者の三つの用法を持つ V-ing のことを V-ing 形と呼ぶとしよう。そして、V-ing 形ならびに V-ing 名詞と、従来の学校文法（もしくは伝統文法）における V-ing の分類を対応づけると、次のようになる。



今後の学校文法では、少なくとも V-ing と関連の領域に関し、(19) でまとめられているような本稿での分類に則った改善が望まれるが、その際、既に触れてきた次のような点には十分な留意が必要である。(I) 動名詞ならびに現在分詞という用語を排すとともに不必要な分類を止め、代わって V-ing 形という用語の導入を図る。(II) V-ing 形が持つ三つの用法を to 不定詞の持つ三つの用法と関連付ける。(III) V-ing 名詞は単なる派生名詞の一種であり、V-ing 形との峻別を行う。

このような改善を一つの足がかりとして、より良い学校文法の構築が求められる。

参考文献

- Abney, Steven P. (1987) *The English Noun Phrase in Its Sentential Aspect*, MIT diss.
- Dixon, Robert M. W. (2005²) *A Semantic Approach to English Grammar*, Oxford University Press, Oxford.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, University of Cambridge Press, Cambridge.
- Jaworska, Ewa (1986) "Prepositional phrases as subjects and objects," *Journal of Linguistics* 22, 355-374.
- Kay, Paul and Charles J. Fillmore (1999) "Grammatical constructions and linguistic generalizations: the *What's X doing Y?* construction," *Lg* 75, 1-33.
- 向後朋美, 小松千明, 林弘美 (2010) 『アルファ英文法』, 研究社, 東京.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2, Descriptive Application*, Stanford University Press, Stanford.
- McCawley, James D. (1998²) *The Syntactic Phenomena of English*, University of Chicago Press, Chicago.
- Newmeyer, Frederick J. (2003) "Theoretical implications of grammatical category-grammatical relation mismatches," in *Mismatch* ed. by Elaine J. Francis and Laura A. Michaelis, CLSI Publications, Stanford, 149-178.
- Pullum, Geoffrey K. (1991) "English nominal gerund phrases as noun phrases with verb-phrase heads," *Linguistics* 29, 763-799.
- Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Swan, Michael (2005³) *Practical English Usage*, Oxford University Press, Oxford.
- 安井稔 (2008) 「動名詞が危ない」, 『英語学の見える風景』, 開拓社, 東京, 2-22.